

連載

天文教育普及研究会の歴史（その6）

水野孝雄（元東京学芸大学）

21. 年会の開催場所

どこで年会を開催していただくかは、執行部として悩ましいことである。

基本的には、支部の会員数と支部委員の数に応じて年会開催の間隔年数を考えている。さらに支部の広さや交通の利便性、宿泊場所の確保、開催地に目玉となるものがあるかどうかも考慮に入れられている。

21.1 大きな望遠鏡をもつ公開天文台を目玉にした年会の開催

1990年の第4回天文教育研究会は[1]、その年の5月にオープンしたばかりの西はりま天文台（口径60cm望遠鏡）で開催された。1994年の第8回天文教育研究会では[2]美星天文台の口径101cm望遠鏡を見学し、次の年の年会は再び宿泊施設をもつ西はりま天文台で開かれた。

このころから口径1mを超す望遠鏡をもつ天文施設が多くなり、1993年の「公共天文台要覧」に続いて1997年度版の作成のために

公開天文台（公共天文台）調査が行われた[3]。

1998年には口径103cm望遠鏡と快適な宿泊施設をもつさじアストロパーク佐治天文台で第12回天文教育研究会が開催された。さらに1999年にはかわべ天文公園とみさと天文台（口径105cm望遠鏡）の協力で年会が開かれた[4]。

このような公開天文台の状況に対して、「公開天文台よどこへ行く」を黒田武彦氏（西はりま天文台）が1999年の「天文教育」9月号の特集の中で書いている[5]。そこには公開天文台は、最も大きな自然を相手にできる本物体験の場であると述べている。さらに、「平和の問題を考える際に、環境問題を語る際に、差別を無くす問題を議論する際に、宇宙を題材にし大きな成果をあげることができた」と続けている。

次の2000年の年会は[6]、群馬県で行われ、口径150cmの望遠鏡をもつぐんま天文台を見学した。極めつけは、口径2mのなゆた望遠鏡が完成した西はりま天文台公園で4度目



図1 天文教育研究会〈年会〉参加者数
天文教育 2013年5月号 (Vol.25 No.3)

の年会(2005年)開催である。

21.2 年会開催が初めての支部

1998年から会長になられた横尾武夫氏は、年会を2001年には九州・福岡県で[7]、次の年は一転して北海道・大沼で開催することにした[8]。九州支部も北海道支部も面積が広いのに会員数が少なく、年会開催が大変である。実行委員長はじめ他の委員も開催準備段階から苦労なので、せめて開催期間を従来の3泊4日から2泊3日にして、その負担を少しでも軽減するように努めた。参加者にとっても4日間の休暇は取りづらくなっていたので、その後の年会は全て2泊3日となっている。表1における1会員あたりの面積を見ると北海道での年会開催は今後かなりの工夫と支援が必要である。

2001年度までは単独で四国支部があり、会員数は10人で、1会員あたりの面積は1,880 km²/人であった。1988年に本四連絡橋(瀬戸大橋)が完成していたこともあり、四国支部は中国支部と合併することが2001年の年会で決定され、2002年度から中国・四国支部となった。早速、2003年に四国で初めての年会を香川県・仁尾町で開催した[9]。

22. 会誌「天文教育」の編集

会誌の編集長は1998年9月号まで、長らく高橋典嗣氏が務めてきた。会長が関西人の横尾武夫氏(大阪教育大学)になったのを機会に1998年11月号から尾久土正己氏(みさと天文台)に引き継がれた。どのようにして原稿を集めるかは、どこの会誌でも苦労するところである。尾久土編集長は就任から2001年7月号まで特集号を貫いた。また、このときに会誌がようやく第3種郵便物として認可され、郵送料が安くなった。

2001年9月号から沢武文氏(愛知教育大学)が編集長を引き受けた。会員の声を聞くために、「会誌に期待すること・望むこと」のアンケートをとった[10]。このとき、会誌の最終編集作業でDTP(パソコンを用いた印刷前処理工程)なるものが行われていることを一会員として初めて知った。その数年前まではプリントアウト原稿をそのまま写真製版されていたが、パソコン処理により写真も鮮明になり、紙面のクオリティーが格段に上がっていた。

1年後の2002年7月には沢氏は会長にも就任することになったので、2002年9月号から栗野諭美氏(岡山天文博物館)が編集委

表1 各支部の面積・会員数・年会開催数

支部名	面積 (km ²)	会員数 (人)	1会員あたり面積 (km ² /人)	年会開催数 (2013年含み)	23年/開催数
北海道	83,500	19	4,395	1	23
東北	66,800	49	1,363	2	12.5
関東	36,900	206	179	8	2.9
中部	55,600	105	530	4	5.6
近畿	27,300	130	210	6	3.8
中国・四国	50,700	71	714	4	5.6
九州	44,400	36	1,233	2	12.5

* 会員数は2012年9月現在。年間開催数は2013年を含む。

員から編集長になった。2004年9月号から作花一志氏〈京都情報大学院大学〉が長らく編集長を務めた。2012年9月号から松村雅文氏〈香川大学〉が編集長を続けている。

ついでながら述べると、このころに世の中の種々のものがアナログからデジタルに置き換わっていった。発表でのプレゼンテーションも透明シートにコピーしたものをOHP(オーバーヘッド・プロジェクター)にのせて投影していたが、パソコンを液晶プロジェクターに接続して行えるようになった。

23. 会長と事務局

歴代の会長と事務局を列記する。

- ・1989年の第3回天文教育研究会で代表世話人に磯部琇三氏〈国立天文台〉が就任した。事務局も国立天文台に置く。
- ・1993年に新会則により初めての選挙を行い、会長に磯部琇三氏〈国立天文台〉が当選した。事務局も国立天文台に置く。
- ・1994年の選挙で会長に水野孝雄氏〈東京学芸大学〉が当選し、2期〈4年〉務める。事務局も東京学芸大学に置く。
- ・1998年の選挙で会長に横尾武夫氏〈大阪教育大学〉が当選し、2期〈4年〉務める。事務局長には西村昌能氏〈京都府立向陽高等学校〉が任命される。
- ・2002年の選挙で会長に沢武文氏〈愛知教育大学〉が当選し、2期〈4年〉務める。事務局長には服部完治氏〈名古屋市科学館〉が任命される。
- ・2006年の選挙で会長に松村雅文氏〈香川大学〉が当選し、2期〈4年〉務める。

事務局長には服部完治氏が任命され、2008年6月まで務める。2008年7月から2010年6月まで沢武文氏が務める。

- ・2010年の選挙で会長に嶺重慎氏〈京都大学〉が当選し、2期〈4年〉務める。事務局も京都大学に置く。

文 献

- [1] 1990「第4回天文教育研究会」〈集録〉.
- [2] 1994「第8回天文教育研究会」〈集録〉.
- [3] 小野智子 1998「第12回天文教育研究会」〈集録〉.
- [4] 1999「第13回天文教育研究会」〈集録〉.
- [5] 黒田武彦 1999「天文教育 Vol.11, No.5」9月号, 14-17.
- [6] 2000「第14回天文教育研究会」〈集録〉.
- [7] 2001「第15回天文教育研究会」〈集録〉.
- [8] 2002「第16回天文教育研究会」〈集録〉.
- [9] 2003「第17回天文教育研究会」〈集録〉.
- [10] 2001「天文教育 Vol.13, No.5」9月号.

水野 孝雄

* * * * *